2010年度　第 6 回特別講義　レポート

日時	2010 年 11 月 12 日（金）　10:00～12:00
会場	(財)日本科学技術連盟・東高円寺ビル　地下1階講堂
テーマ	「レビューのすすめと進め方　レビューってなんだろう？」
講師名・所属	第 3 分科会　ソフトウェア・ユーザビリティ分科会主査　安達　賢二氏　（株式会社HBA）
司会	細川　宣啓氏（日本アイ・ビー・エム株式会社）
アジェンダ	1. レビューとは 2.　レビューの進め方：　目的、視点、構造、見極、共有
アブストラクト	レビューはソフトウェアの欠陥を早期に検出し、開発生産性を向上させるだけではなく、関係者の認識共有や合意形成、様々な判断、さらには要員の技術教育など多くの効果が期待できると言われている。しかし、目的を不明確にしたまま、あるいはさまざまな視点・観点を持たずに、そして人間が持つ特性を理解せずに"なんとなく"行うレビューでは期待した成果が得られないことが多い。それでは目的を明確にし、必要な視点・観点を持ってやるにはどうしたらよいのか。人間が持つ特性にどのように対応するとよいのか。実例を交え、レビューのあり方やその目的と意味を再確認する。

＜講義を通じて感じたこと、得たこと＞

1. レビューとは

一般に「欠陥の早期発見にはレビューが効果的である」と言われていますが、私個人の経験も踏まえ、あまり効果が上がっていない現場は多くないように思われます。「レビュー」という用語は一般的に浸透していますし、ある程度は理解していたのですが、実は「理解していたつもり」かつ「レビューではないレビューを行っていた」ことが良くわかりました。講義の冒頭で紹介された一枚の写真より、限られた情報による考え方（イメージ）の偏りを体験し、レビューに対する認識の甘さを痛感しました。

2. レビューの進め方：目的、視点、構造、見極、共有

　ごく当たり前なことですが、レビュー目的を明確にし、参加者が目的を適切に理解・共有することの重要さを再認識しました。今まで行っていた内容は安達先生がおっしゃっていた「誤字脱字チェック」や「検討会」に相応する内容でした。レビュー活動の改善や効果向上のため、レビュー目的をしっかり設定し共有するところから着手しようと思います。

レビュー実施時、さまざまな視点を持って二次的に確認するだけでなく、レビュー対象物に至る過程や利害関係者のつながりなどの三次元的な要素を考慮する点は、今回の講義から得た大きな気づきでした。レビュー対象物のプロパティまで確認するとはさすがに思いつきませんでした。新たな視点として是非取り入れたいです。以前、作成したレビューチェックシートが活かされなかったことがあったので、今回ご紹介頂いたスープカレー表などを参考にしながら、運用を目標として再度見直そうと考えています。

また、作成者とレビューアの間とで対立関係が成立してしまって上手く行かないこともしばしばあります。レビュー目的の再認識を促して意識を共有するため、アナログ的ですが、レビュー実施前に全員で声を出して繰り返し読み上げることも効果があると思います。相手へのものの伝え方として、コーチングのI（アイ）メッセージの必要性や効果を思い出しました。

レビューアの育成、技術力、コミュニケーション能力など、レビューは様々な面における改善効果を生み出す大事な場です。今回の講義全体をもう一度振り返り、ポジティブなレビュー活動を目指したいと思います。